

「地域創造学環」の学修プログラム

ーフィールドワーク篇ー

人文社会科学領域・法学系列 日詰一幸

昨年4月より立ち上げられた静岡大学の全学教育プログラムである「地域創造学環」では、「フィールドワーク」がカリキュラムの柱となっている。地域創造学環における「フィールドワーク」は必修科目として位置づけられており、1年生後期に始まり、3年生後期まで2年半にわたって履修することになる。そして、学生たちがフィールドワークを履修するにあたり、各年次での主な目標は次のように整理することができる。それは、1年次「フィールドの課題発見」➡2年次「フィールドの課題追及」➡3年次「フィールドの課題解決」である。学生たちは、この「フィールドワーク」を1年次から3年次まで履修した後、4年次に「卒業研究」で自らが選択したフィールドまたはその他の自分が関心を持つフィールドとそこでのテーマをもとにして論文ないし作品を制作することになる。

地域創造学環では、フィールドワークを実施していくにあたり基本方針を定めたが、それを次のようにまとめている。

①学環におけるフィールドワークの位置づけ

地域がかかえる問題や課題の中から、学生が取り組むテーマを確定し、それに対応するための専門知識や技量（スキル）を学ぶ機会とする。

②フィールドとの関わり方～複数年対応型

これまでのフィールドワークでは単年度で終了してしまうものがあったが、学環におけるフィールドワークは単年度完結型ではなく、数年間にわたり地域及びその関係者と連携しながら課題解決に取り組む。

③フィールドワークに取り組む学生の構成～コースおよび入学年融合型

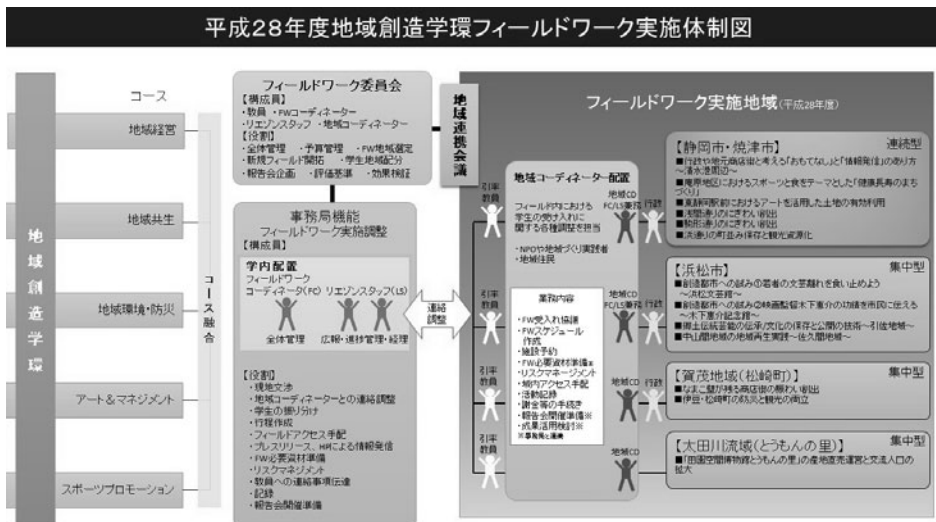
学環では、学生が選択したフィールドとは複数年にわたって関わることを目指しており、各コースの学生が縦割りに仕切られた形でフィールドワークを行うのではなく、コース並びに入学年の枠にこだわらないグループ編成を行い、フィールドワークを実施することを基本方針としている。

以上のような方針で実施するフィールドワークであるが、カリキュラムとしては体系性を持っており、次に示すような科目との関連性を配慮した展開となっている。すなわち、「地域づくりの課題」（フィールドの概要を学び、フィールドワークの準備を行うと共に情報を共有する）、「地域創造演習」（フィールドワークでは、コースの仕切りを取り除いてコース横断型とするが、「地域創造演習」では、コース毎に専門的知識を修得する場とする）、「コミュニティアワー」（フィールドワークの準備）、「社会調査入門」「プレゼンテーション入門」「ファシリテーション入門」等の科目（フィールドワークに必要な調査方法や技量を学ぶ）から構成されている。

2016年度のフィールドワークにおいて、学生たちは宿泊を伴わない「連続型」（静岡市、焼津市）と宿泊を伴う「集中型」（浜松市、松崎町、掛川市とうもんの里）からそれぞれ1つのフィールドを選択して2地域でフィールドワークを実施した。今年度のフィールド

ワークの実施体制は図に示した通りとなっている。フィールドワークの実施にあたっては、「フィールドワーク委員会」で全体の体制を検討し、フィールドワークオフィスで実施に向けての調整がなされていく仕組みが形成された。フィールドワークオフィスには、フィールドワークコーディネーターとリエゾンスタッフが配置され、引率する教員や地域コーディネーター、さらには行政機関との連絡調整がなされる。今年度はフィールドワークの初年度であったが、地域創造学環におけるフィールドワーク実施にあたっての基本的な枠組みが構築できたと判断している。今後は、今年度のフィールドワークの経験を活かしながら、必要に応じて体制を強化していくことになっている。

今年度52名の学生たちは、「連続型」と「集中型」を合わせて13の地域でフィールドワークを実施した。今年度は特に地域を知ることを中心としたフィールドワークであったが、学生たちは地域の人々や諸機関の方々と交わり多くの学びを得たと感じている。2年次では、2つフィールドを1つに絞りフィールドワークを実施することになるが、後期からは新たに入学する1年生も交えてのフィールドワークになる予定である。いろいろと挑戦することの多い地域創造学環のフィールドワークであるが、学生たちは着実に多くの学びを引き出していると感じている。これらの学習成果は、次年度5月25日(木)に清水マリナートにおいて、一般公開で報告会を実施する予定である。



写真：松崎町でインタビューをする学生たち